

見てもらったところ、やはり専門家の眼は高く、「鎌倉において一番大事なものは山でしょう」と、我々と同様の意見を頂いた。そこで文化庁と交渉し、国史跡でなくて、古都保存法で十分に管理可能という方向を引き出し、従来の方針と違って、国史跡と古都保存法を併せて資産にするという形でもって、世界遺産というものを練り上げている。

✧推薦書作成のプロセス

平泉の世界遺産登録の審査過程で、イコモスの指摘が出て柳之御所を切ったことでもわかる通り、審査では、それぞれの資産がコンセプトに合うのかについて、ちょっと視野が狭いのではと思うほど詰めてくる。鎌倉の世界遺産も20数か所がすべて対応すると認められるか、難しい問題が出てくるかもしれない。我々は、山を基本にして、20数か所の資産を含める形で、鎌倉の北側の山、東側の山、西側の山、それ以外の飛び地になっているところを6つか7つくらいのゾーンに分けて説明できる仕組みを作っておかなくてはいいない。世界遺産の基準はイコモスの外国の視点があるので、微妙に少し変わる。それに対応するような形に持っていく作業が必要と考えているので、最終的に推薦書ができる段階でこれまでと違ったものが出てくるかもしれないが、基本的にコンセプトは同じで、武家文化を育んだ場であり、他に例を見ない武家政権の所在地である、この2点で世界遺産・鎌倉を評価することになる。

✧武家政権発祥の意義と徳政

武家文化を説明するのは難しいが、武家が何百年も政権を持って文化の担い手になっていたという例は、世界で例がない。ヨーロッパでは騎士文化、イスラムではマムルーク等騎士階級が存在はあるが、基本的には文化・政権の担い手ではない。一方日本ではなぜ武家文化が誕生し、成長・発展してきたのかを考える必要がある。

武家政権の誕生を考えると、鎌倉以前の頼朝の動きというのが非常に重要で、伊豆の北条にまで遡る。鎌倉幕府の歴史を描いた『吾妻鏡』の最初は、伊豆の北条館で、頼朝と北条時政が平氏打倒を命ずる以仁王の令旨を開く場面だ。『吾妻鏡』においても、鎌倉幕府の原点はここにあるという意味合いがあつての記事だろう。令旨を中心にして、貴種の長者である頼朝と、東国武士団を代表する北条時政が結びつき、武家政権が始まったと考えられるだろう。

頼朝は、伊豆で旗揚げの直後に下文を出し、「東国一帯の支配権・統治権を与えられ、東国一帯の民衆を救う」と最初の段階から打ち出している。これが重要で、政権の理想、何を政治がもとめていくかが見えていると思う。単に平氏打倒を求めて挙兵している

のではなく、東国一帯の民衆を、朝廷と違って統治していかなければいけないということを標榜している。これが平氏にも奥州藤原氏にもない、全く違った考え方に基づいて出発しているところだ。平氏を追討した後、元暦元年(1184)に頼朝は『朝務の事』を院に奏請し、東国北国の民は「徳政」により鎌倉幕府が安堵するので、西国はそれに倣って朝廷が撫民し「徳政」を行うように求めている。頼朝の政治は三代將軍実朝や、後に執権となった北条泰時に受け継がれた。泰時は徳政政策と訴訟政策を展開し、『貞永式目』を制定、これはその後の武家政権の法の骨格となった。そして頼朝の政治的理想と政策は『吾妻鏡』を通して、後北条氏・北条早雲から徳川家康に受け継がれる。

✧武家文化形成の4つの段階

鎌倉の武家文化は4つの段階を経て成長したと考えている。武家文化の形成に重要な意義を持つのは鶴岡八幡宮だ。11世紀に源頼義が由比に鶴岡若宮を勧請し、12世紀には義家が整備した。そして1180年、頼朝は大倉御所を建て鶴岡若宮を現在地に移し、若宮大路を整備した。若宮は従来の子で、疫病飢饉を救うために現れた新たな神である。若宮信仰を基本においたことで、頼朝の非凡な一つの性格が現れる。頼朝は鎌倉で独特の精神と倫理を育む基礎を築いた。鎌倉中の都市領域を定め、道路整備をし、鶴岡八幡宮で放生会を開く。殺生を生業とする武士が生き物を放して殺生を戒めるというもので、これは最も重要な祭礼とされた。また相撲や流鏑馬、競馬など武芸が奉納され、鶴岡八幡宮で始められた神事や仏事、幕府の御所で行われた年中行事は武家全体の年中行事を形成し、やがて各地の武士や農民の暮らしに取り込まれた。現在の日本人の年中行事を遡っていくとその源流は鎌倉にあり、武家文化の源は鎌倉で形成されたのである。その中心となったのが鶴岡八幡宮と幕府御所である。本来なら鎌倉幕府のあった場所、御所跡くらいが資産にならなければおかしい。今後重要な問題になるかもしれない。

もうひとつ重要なのは永福寺である。鎌倉初期の武家文化のひとつの展開で、奥州合戦で亡くなった人を弔うという新たな精神文化が生まれた。その延長線上になるのが円覚寺、蒙古襲来の戦没者を敵味方なく弔うという目的で作られている。

頼朝が亡くなると、蹴鞠や和歌、公家風御所の造営や陰陽道等、京都風の「王」を護る装置を入れていったのが実朝の時代だ。実朝が作ったお寺が大慈寺で、仏の慈悲を強調する寺が作られる。京都文化の方向性をより打ち出したと言ってよい。

(次号に続く)

◆ 鎌倉市観光協会 会長 井手太一さんに聞く ◆

震災からの復興支援を、まず流鏑馬から

東日本大震災1ヶ月後、鎌倉市観光協会会長の井手太一さんに、震災後の鎌倉の状況や世界遺産登録などについて伺いました。震災では鎌倉も企画の中止など影響を受けていますが、「世界遺産登録によって、鎌倉を訪れる人々をも巻き込んだまちづくりを進めたい」と抱負を語りました。以下、要旨です。

◆ 震災の影響と流鏑馬の復活

3月11日以降、観光への打撃は大きかった。八幡宮境内もこれほど人がいないのは初めての経験と宮司も言っておられた。震災後2週間はこんな状況だったが、JRの乗降データもだんだんと盛り返して、桜シーズンには8割くらいに戻った。3月17日に理事会で、「祭」と名のつくものは無理だろうという判断で、4月10～17日の鎌倉まつりは中止にした。ところが「決断はちょっと早かったのでは。せめて流鏑馬くらいは、やって欲しかったですね」との意見もあり、当初の予定通り4月17日に流鏑馬だけ復活させることになった。復興支援チャリティーとして、オール鎌倉体制で臨んだ。7月の花火大会は「やらない」というより「できない」というのが現状である。今、集めるべきは義援金だろうし、仮設トイレ等のインフラも東北に集中して花



震災復興のために公開された「天長地久」の儀

火にまわす余裕はないという。余震の危険性も考えると海のイベントは難しい。

◆ 息の長い復興支援を

流鏑馬をきっかけに、今後も復興イベントを予定している。5月7日の長谷寺と鎌倉宮で追善供養復興万灯をはじめ、10月には鎮魂のための演目で薪能を予定しており、いずれも義援金につなげていく。復興支援は一過性のものではなくずっと続けていかないといけない。来年、再来年と続けていきたいという考えは市長とも一致している。

◆ 世界遺産登録は、絶対実現してほしい

私自身、世界遺産には全面的に大賛成で登録に向けて協力していきたい。登録で鎌倉のステータスを1ランク上げたいと思っている。「この町を守る。この町は汚してはいけない」というきちっとしたステータスを作って、おもてなしするだけでなく、そういう気持ちを持った方に来ていただきたい。そういうまちづくりをしなくてはいけないと思っている。観光客を増やしたいというのとは違う、もう一步上のランクを我々はめざすべきだと思う。そういう鎌倉を見たくて定期的に来てくれるようにしたい。市内の整備は少しずつ進んでいるが、現状はまだ手つかずのところが多い。「世界遺産の町なのに、これじゃダメだ」と言える大義名分が生まれる、そういう意味でも世界遺産登録は絶対必要だ。

平成23年 秋のイベントのご案内

涼風立つ頃、鎌倉で『武家文化』に触れてみませんか？お申込方法は広報かまくら等でご案内します。

推進協議会主催 鎌倉市観光協会共催

講演会

もっと知ろう、世界遺産第4弾
「世界文化遺産と鎌倉」

世界遺産を専門とされる筑波大学大学院教授の稲葉信子さんに、世界の文化遺産との比較や、世界遺産登録における視点から、「武家の古都・鎌倉」の魅力について、お話しいたします。

◎当日は平成22年度「世界遺産登録に向けての中学生作文コンクール」入賞作品の朗読や、県立鎌倉高校の生徒による「かまくら学」の研究成果発表をあわせて行う予定です。

と き 11月13日(日) 14時～16時

ところ 鎌倉商工会議所 地下ホール

定 員 130名 参加費 無料

推進協議会主催 鎌倉の世界遺産登録をめざす市民の会共催

第5回 ワークショップ

「住んでよく、訪れてよい鎌倉のまちづくり」

鎌倉市は世界遺産登録に向けた準備を国・県・横浜市・逗子市と進めていますが、今回は世界遺産にふさわしい鎌倉のまちづくりに関し、松尾市長等キーパーソンをゲストに迎え活発な話し合いをしよう、という企画です。従来と同様、鎌倉市民と首都圏の方々の積極的参加を期待いたします。

と き 11月27日(日) 13時30分～16時30分

ところ 市役所講堂

定 員 60名 参加費 無料